2025/2/9
ルカの福音書　講解メッセージ㊸
『ルカの福音書 18 章 15-30 節　幼子の信仰』

■神の国は幼子のもの

> 「イエスにさわっていただこうとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかった。しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」
>
> （ルカ 18:15-16）

「神の国は、幼子のような者たちもの」とイエス様は言われました。

神の国とは、死がない世界です。しかし、有限性の世界に生きている私たちは、「死がない」と言われても、想像がつきません。そこで、「それは単なる妄想で、現実にはあり得ない」と考える人たちもいます。「神なんか見えないし、そんなの信じるに値しない」という人たちも大勢います。人の知恵や知識は、このように、神の国を拒否してしまいます。

しかし、幼子は違います。幼子も大人と同様、この有限の世界に生きていますが、その決定的な違いは、素直に信じるところです。幼子は、大人と違って、自分の限界をよくわきまえています。人は、成長して自分でできることが増えていくと、自分の力で生きているという錯覚に陥るようになります。しかし、幼子は、自分は一人では生きられないことを知っています。幼ければ幼いほど、自分の力で生きられるという錯覚が少ないので頼ります。それは、信じる信仰がそこに強く働くということになるのです。自分には何かができると思えば思うほど、信仰は成長しなくなります。神の国を受け入れるとは、行いでも能力でもなく、ただ信じる信仰によるのです。

> 「まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」（ルカ 18:17）

信じる者しか神の国に入れないということは、行いによって神の国に入ることはできないということです。

この世の常識では、何かを手にするには、対価を払わなければいけません。ディズニーランドに入るためには、チケットを買わなければならないのです。この考え方で

生きている私たちは、天国に行くためには何をしなければいけないのかと、自然に考えます。ですから、この世の宗教は、良いことをすれば天国に行けて、悪いことをしていると天国には行けないと教えます。そのため、救われるために自分には何ができるのかを考えるわけですが、そのとき、人との違いを見つけて、自分を知ろうとするところに間違いがあります。

人が自分を知ろうとする方法は、人との比較です。しかし、人は変化します。変化するものを物差しにして、自分を知るのは不可能です。毎日変わる物差しで、本当の自分がわかるはずがありません。

自分が何者かを知るには、変わらない物差しと比べなければなりません。この世界で唯一変わらないのは、イエス・キリストです。神のことばは変わることがありません。ですから、神と自分を比べて自分を知るべきであって、自分を知るために人と比べるのは、間違いなのです。人と比べても自分の本当の姿はわかりません。

神と自分を比較した時に見えてくるのは、無、すなわち、何もできない自分です。宇宙を造られた神の前に、私たちはあまりにも小さく、そこで、「私には〇〇ができる」と誇ったところで、虚しいだけです。この真実な姿を人は知らないのです。神抜きで自分を知ろうとするからです。神の前で、私たちには何ができるというのでしょうか。助けを請うことしかできません。

ところが、人は、人と自分を比べて、自分には何かができるという錯覚に陥っているので、自分を誇り、それによって神の国に入ろうとします。また、互いの行いを比べて人の価値を知ろうとするため、相手の行いもさばきます。パリサイ人は、そのような象徴です。

> 「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」（ルカ 18:11-12）

このパリサイ人の行いは、大変立派なものです。けれど、イエス様は、「この人は神の国に入れない」と言われました。彼は、自分のことを何もわかっていません。それは、人と自分を比べているからです。人と比べて自分を知ることはできません。私たちが自分を知る唯一の方法は、動くことのない物差しである神と比べることです。そして、神と比べるならば、自分は無でしかないということを知るのです。聖書ではこのような人を「弱い者」と呼び、神の恵みはこの弱さのうちに完全に現れると言っています。神は、何かができるからあなたを愛しているのではなく、あなたが何もでき

ないから、あなたを愛するのです。

■あなたは無力だ

> 「またある役人が、イエスに質問して言った。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。戒めはあなたもよく知っているはずです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」（ルカ 18:18-21）

この役人も、何かができることで神の国に入れると思い込んでおり、行いの上でイエス様と自分を比べました。しかし、彼は、イエス様を人として見ていました。そして、自分も多少のことはできるという自負を持っています。それに対してイエス様が、「尊い方は、神おひとりのほかにはだれもありません。」と答え、なぜ人と自分を比べるのか、神を見て、神と自分を比べなさいと導いておられます。しかし、彼はこのことに気づかず、自分の行いを誇り続けました。そこで、イエス様は次のように言われました。

> 「イエスはこれを聞いて、その人に言われた。「あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。」（ルカ 18:22-23）

神は、私たちのためにご自分のいのちさえ、捧げてくださいました。貧しい者に自分のすべてを施すなど、神にとっては造作もないことです。彼は、神に近い行いができるようになれば神の国に入れると思っていたわけですが、イエス様は、神の前ではあなたは無力だということをお教えになったのです。もし彼が自分の無力さに気づくなら、次にできることは、前出の取税人のように「神様、私を憐れんでください」と祈ることだけです。

「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」（ルカ 18:13-14）

イエス様は、このように自分の限界を知って神に助けを求める人が救われるのだと言われました。人は、能力に関係なく神の国に入ることができます。ですから、神に助けを求める機会を多く持っている貧しい者は幸いなのです。

■この世のものを手放すとは

「イエスは彼を見てこう言われた。「裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」これを聞いた人々が言った。「それでは、だれが救われることができるでしょう。」イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」」（ルカ 18:24-27）

神の国は、永遠性で、この世界は有限性です。ですから、神の国に入るには、有限性を捨てなければなりません。これを聖書は、「十字架に死ぬ」と言っています。

この世界で生きている私たちは、多くの見えるものを手放すことができずにいます。しかし、私たちは、すでに神の手をつかんでしまいました。神は、一度つかんだ私たちの手を放さず、ご自分のほうに引き寄せようとしておられます。そこで私たちは、片方の手はこの世のものをつかみ、もう片方の手は神に引き寄せられている状態になります。これがクリスチャンの苦しみです。クリスチャンになるということは、このような新たな苦しみを背負うことを意味するのです。

この世のものの中で、最も手放すのが難しいのはお金です。そのため、イエス様は、「金持ちが神の国に入るのは難しい、いや、無理だ」と言われたのです。「無理」とまで言われると、「では、いったい誰が神の国に入れるのか」という疑問が生まれます。そこで、イエス様は「人にはできないことが神にはできる」と、言われました。ここに希望があります。つまり、人を救うのは神であって、人の努力ではないということです。

私たちは、肉体の死の際にはすべてを手放すことになります。だから、肉体の死と同時に、私たちは一瞬のうちに神に引き上げられるのです。自分の力で永遠のいのち

を得ることはできませんが、ただ神に応答するだけで、神が救ってくださいます。私たちができることは、ただ神の御手にすがることだけです。

> 「すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」（ルカ 18:28-30）

「神の国のために」とありますが、正確には「神の国のゆえに」という意味です。神の国に入った安心のゆえに、見える安心を捨てるなら、前よりもっと安心になるということです。また、「後の世で永遠のいのちを受けない者はない」とは、時制には関係ない説明であって、将来、後の世で永遠のいのちを受け取るという意味ではありません。原文のニュアンスは、永遠のいのちを持っていない者は神の国にはいない、つまり、永遠のいのちのない者は神の国に入れないという説明になっています。私たちはすでに神から永遠のいのちをいただいているからです。

つまり、永遠のいのちを受け取って見える安心を捨てれば捨てるほど、心が神に向いて、前よりももっと安心を得ることができるのです。それが永遠のいのちが豊かになるということです。そして、その豊かさは天国でも継続できるのです。いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です。私たちがこの世界で築いた神との関係は、そのまま継続します。

また、「神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てる」とは、物理的なことを言っているのではありません。神が教えているのは、人を愛することです。ですから家族を捨てるとは、関係を断ち切ることではなく、神にゆだねるということです。人は人間関係を良好にすることで、安心な自分の逃げ場にしようとするものです。そうではなく、安心の材料としていたものを神にゆだね、神への信仰に変え、そうして、見える安心を受け取りなおしなさいと、神は教えておられるのです。人に頼るのではなく、神に頼ることで、安心を手にするのです。

その模範が、信仰の父と呼ばれるアブラハムです。アブラハムは、どのような信仰を持っていたのでしょうか。あきらめないで祈り続けたことも、子どもが与えられる状況ではなかったのに希望を失わなかったことも素晴らしい信仰ですが、アブラハムの信仰の偉大な点はそこではありません。見える安心を手放したところに、彼の信仰の偉大さがあります。

彼は多くの財産を持っていましたが、それは彼にとって見える安心ではありません

でした。彼の見える安心は、イサクです。イサクは、アブラハムの晩年になってようやく生まれた子どもで、彼は本当にイサクを愛していました。イサクこそがアブラハムの希望でした。

ところが、神は、イサクをいけにえとして殺すように命じられました。それは、アブラハムの心がイサクに向いていて、イサクとの関係で平安を得ていたため、神との関係の邪魔になっていたからです。神は、神との関係の邪魔になるものを手放すために、イサクを捧げるように命じられたのです。これは、アブラハムにとって、大変な苦しみでした。神は、私たち一人一人にできないことを要求し、自分の限界にぶつかるように導き、神に助けを求めざるを得ない状況を作られます。そのため、青年に全財産を捧げるように言ったのと同様に、アブラハムにイサクを捧げるように言ったのです。

苦しみの中から祈るアブラハムに、神は彼を助けました。いったいどのように助けたのでしょうか。神の約束を思い起こさせたのです。それは、イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれるという約束です。ということは、イサクを捧げて殺してもイサクはよみがえるのだと、アブラハムは悟ったのです。アブラハムは、神は死人さえもよみがえらせることができるのだという信仰を神様からいただいたのです。神から信仰を受け取ったアブラハムが、イサクを祭壇に乗せ、いけにえとして捧げようとしたその時、神はそれをやめさせました。アブラハムが神にイサクをゆだねた時、神は再びアブラハムにイサクを返しました。受け取り直しをさせたのです。

こうして、アブラハムは神から友と呼ばれるようになりました。アブラハムはこの世界で握っているものはなくなり、完全に手放すことができたからです。大切なことは、あなたが心配するのではなく、神にゆだねるということです。

> 「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる」と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。」（ヘブル 11:17-19）

アブラハムがイサクをゆだねることができたのは、神のことばを信じることができたからです。見える安心を、神のことばに置き換えることができたということです。見える安心を神にゆだねて、信仰による安心として受け取りなおすのです。

私たちはどうしても見えるものに執着してしまう限界があります。しかし、いのち

も健康も家族も、究極的にはあなたを助けることはできません。あなたを助けることができるのは神だけです。そこで、自分で心配することをやめて、神にゆだね、神に任せられるようになると、再び見えるものを受け取りなおすことができます。しかし、今度はもうそれが自分の心を騒がすことはありません。これが、神を信頼する生き方に変わるということです。

見える安心を捨てるとは、物理的に縁を切るということではなく、神への信仰に切り替えるということです。あなたが思い煩っていることを神にゆだね、神への信頼という安心に変えて、受け取りなおすことができれば幸いです。